

女生徒

太宰治



あき、眼をさますときの気持は、面白い。かくれんぼのとき、押入れの真つ暗い中に、じつと、しゃがんで隠れていて、突然、でこちゃんに、がらつと襖ふすまをあげられ、日の光がどつと来て、でこちゃんに、「見つけた！」と大声で言われて、まぶしき、それから、へんな間の悪さ、それから、胸がどきどきして、着物のまえを合せたりして、ちよつと、てれくさく、押入れから出て来て、急にむかむか腹立たしく、あの感じ、いや、ちがう、あの感じでもない、なんだか、もつとやりきれない。箱をあげると、その中に、また小さい箱があつて、その小さい箱をあけると、またその中に、もつと小さい箱があつて、そいつをあけると、また、また、小さい箱があつて、その小さい箱をあけると、また箱があつて、そうして、七つも、八つも、あけていって、とうとうおしまいに、さいころくらいの小さい箱が出て来て、そいつをそつとあけてみて、何も無い、からっぽ、あの感じ、少し近い。パチッと眼がさめるなんて、あれは嘘だ。濁って濁って、そのうちに、だんだん澱粉でんぷんが下に沈み、少しずつ上澄うわぶきが出来て、やつと疲れて眼がさめる。朝は、なんだか、しらじらしい。悲しいことが、たくさんたくさん胸に浮かんで、やりきれない。いやだ。いやだ。朝の私は一ぱん醜みにくい。両方の脚が、くたくたに疲れて、そうして、もう、何もしたくない。熟睡していないせいかしら。朝は健康だなんて、あれは嘘。朝は灰色。いつもいつも同じ。一ぱん虚無だ。朝の寝床の中で、私はいつも厭世的だ。いやになる。いろいろ醜い後悔ばかり、いちどに、どつとたたまって胸をふさぎ、身悶みもだえしちゃう。

朝は、意地悪。

「お父さん」と小さい声で呼んでみる。へんに気恥いじわるずかしく、うれしく、起きて、さつさと蒲団かぶとんをたたむ。蒲団を持ち上げるとき、よいしょ、と掛声して、はつと思つた。私は、いままで、自分が、よいしょなんて、げびた言葉を出す女だとは、思つてなかつた。よいしょ、なんて、お婆さんの掛声みたいで、いやらしい。どうして、こんな掛声を発したのだろう。私のからだの中に、どこかに、婆さんがひとつ居るようで、気持がわるい。これからは、気をつけよう。ひとの下品な歩き恰好かっこうを響ひびく感かんしていながら、ふと、自分も、そんな歩きかたしているのに気がついた時みたいに、すぐ、しよげちゃつた。

朝は、いつでも自信がない。寝巻のままで鏡台のまゝに坐る。眼鏡をかけないで、鏡を覗くと、顔が、少しぼやけて、しつとり見える。自分の顔の中で一ぱん眼鏡が厭いやなだけけど、他の人には、わからない眼鏡のよさも、ある。眼鏡をとつて、遠くを見るのが好きだ。全体がかすんで、夢のように、覗き絵みたいなのに、すばらしい。汚ないものなんて、何も見えない。大きいものだけ、鮮明な、強い色、光だけが目にはいつて来る。眼鏡をとつて人を見るのも好き。相手の顔が、皆、優しく、きれいに、笑つて見える。それに、眼鏡をはずしている時は、決して人と喧嘩けんかをしようなんて思わないし、悪口も言いたくない。ただ、黙つて、ポカンとしているだけ。そうして、そんな時の私は、人にもおひとよしに見えるだろうと思えば、なおのこと、私は、ポカンと安心して、甘えなくなつて、心も、たいへんやさしくなるのだ。

だけど、やつぱり眼鏡は、いや。眼鏡をかけたら顔という感じが無くなってしまう。顔から生れる、いろいろの情緒、ロマンチック、美しき、激しき、弱さ、あどけなき、哀愁、そんなもの、眼鏡がみんな遮さかつてしまう。それに、目でお話をするということも、可笑おかしくもない出来ぬ。

眼鏡は、お化け。

自分で、いつも自分の眼鏡が厭だと思つているゆえか、目の美しいことが、一ぱんいいと思われる。鼻が無くても、口が隠されていても、目が、その目を見てみると、もつと自分が美しく生きなければと思わせるような目であれば、いいと思つている。私の目は、ただ大きいだけで、なんにもならない。じつと自分の目を見てみると、がっかりする。お母さんでさえ、つまらない目だと言つている。こんな目を光の無い目と言うのであろう。ただん、と思うと、がっかりする。これですからね。ひどいですよ。鏡に向うと、そのたんびに、うるおいのあるいい目になりたいと、つくづく思う。青い湖のような目、青い草原に寝て大空を見ているような目、ときどき雲が流れて写る。鳥の影まで、はつきり写る。美しい目のひととたくさん逢つてみたい。

けさから五月、そう思うと、なんだか少し浮き浮きして来た。やつぱり嬉うれしい。もう夏も近いと思う。庭に出ると母いぢの花が目にとまる。お父さんの死んだという事実が、不思議になる。死んで、いなくなる、ということとは、

理解できにくいことだ。腑ふに落ちない。お姉さんや、別れた人や、長いあいだ逢わずにいる人たちが懐なつかしい。どうも朝は、過ぎ去ったこと、もうせんの人たちの事が、いやに身近に、おタクワンの臭においのように味気なく思おもい出されて、かなわない。

ジャピイと、カア（可かわい哀あい想そうな犬だから、カアと呼ぶんだ）と、二匹もつれ合いながら、走つて来た。二匹をまえに並べて置いて、ジャピイだけを、うんと可愛がつてやった。ジャピイの真白い毛は光つて美しい。カアは、きたない。ジャピイを可愛がつていると、カアは、傍で泣きそうな顔をしているのをちゃんと知つている。カアが片輪だということも知つている。カアは、悲しくて、いやだ。可哀想で可哀想でたまらないから、わざと意地悪くしてやるのだ。カアは、野良犬みたいに見えるから、いつ犬殺しにやられるか、わからない。カアは、足が、こんなだから、逃げるのに、おそいことだろう。カア、早く、山の中にも行きなさい。おまえは誰にも可愛がられないのだから、早く死ねばいい。私は、カアだけでなく、人にもいけないことをする子なんだ。人を困らせて、刺戟する。ほんとうに厭いやな子なんだ。縁側に腰かけて、ジャピイの頭を撫なでてやりながら、目に浸しみる青葉を見ていると、情なくなつて、土つちの上に坐りたたいいような気持になつた。

泣いてみたくなつた。うんと息いきをつめて、目を充血させると、少し涙が出るかも知れないと思つて、やつてみたが、だめだった。もう、涙のない女になつたのかも知れない。

あきらめて、お部屋の掃除をはじめ。お掃除しながら、ふと「唐人お吉」を唄う。ちよつとあたりを見廻したような感じ。普段、モオツアルトだの、バッハだのに熱中しているはずの自分が、無意識に、「唐人お吉」を唄つたのが、面白い。蒲団を持ち上げるとき、よいしょ、と言つたり、お掃除しながら、唐人お吉を唄うようでは、自分も、もう、だめかと思ふ。こんなことでは、寝言などで、どんなに下品なこと言い出すか、不安でならない。でも、なんだか可笑しくなつて、箒ほうの手を休めて、ひとりで笑わらう。

きのう縫ぬい上げた新しい下着を着る。胸のところ、小さい白い薔薇ばらの花を刺し續つして置いた。上衣を着ちやうと、この刺繡見えなくなる。誰にもわからない。得意である。

お母さん、誰かの縁談のために大童おおわらわ、朝早くからお出掛け。私の小さい時からお母さんは、人のために尽すので、なれつこだけれど、本当に驚くほど、始終うごいているお母さんだ。感心する。お父さんが、あまりにも勉強ばかりしていたから、お母さんは、お父さんのぶんもするのである。お父さんは、社交とかからは、およそ縁が遠いけれど、お母さんは、本当に気持のよい人たちの集まりを作る。二人とも違つたところを持つているけれど、お互いに、尊敬し合つていたらしい。醜みにくいところの無い、美しい安らかな夫婦、とでも言うのであろうか。ああ、生意気、生意気。

おみおつけの温あたまるまで、台所口に腰掛けて、前の雑木林を、ぼんやり見ていた。そしたら、昔にも、これから先にも、こうやつて、台所の口に腰かけて、このとおりの姿勢でもつて、しかもそつくり同じことを考えながら前の雑木林を見ていた、見ている、ような気がして、過去、現在、未来、それが一瞬間のうちに感じられるような、変な気がした。こんな事は、時々ある。誰かと部屋に坐つて話をしてる。目が、テエブルのすみに行つてコトンと停とまつて動かない。口だけが動いている。こんな時に、変な錯覚を起すのだ。いつだったか、こんな同じ状態で、同じ事を話しながら、やはり、テエブルのすみを見ていた、また、これからさきも、いまのことが、そつくりそのままに自分にやつて来るのだ、と信じちやう気持になるのだ。どんな遠くの田舎の野道を歩いていても、きつと、この道は、いつか来た道、と思ふ。歩きながら道傍みちばたの豆の葉を、きつと筆むしりとつても、やはり、この道のこことここで、この葉を筆むしりとつたことがある、と思ふ。そうして、また、これからも、何度も何度も、この道を歩いて、こことここで豆の葉を筆むしるので、と信じるのである。また、こんなこともある。あるときお湯につかつていて、ふと手を見た。そしたら、これからさき、何年かたつて、お湯にはいつたとき、この、いまの何げなく、手を見た事を、そして見ながら、コトンと感じたことをきつと思ひ出すに違ちがいない、と思つてしまつた。そう思つたら、なんだか、暗い気がした。また、ある夕方、御飯をおひつに移している時、インスピレーション、と言つては大袈裟おおげさだけれど、何か身内にピユウツと走り去つてゆくものを感じて、なんと言おうか、哲学のシッポと言いいたいだけれど、そいつにやられて、頭も胸も、すみずみまで透明になつて、何か、生きて行くこ

とにふわつと落ちついたような、黙って、音も立てずに、トコロテンがそろつと押し出される時のような柔軟性でもって、このまま浪のまにまに、美しく軽く生きとおせるような感じがしたのだ。このときは、哲学どころのさわぎではない。盗み猫のように、音も立てずに生きて行く予感なんて、ろくなことはない、むしろ、おそろしかった。あんな気持の状態が、永くつづくと、人は、神がかりみたいになつちやうのではないかしら。キリスト。でも、女のキリストなんてのは、いやらしい。

結局は、私ひまなもんだから、生活の苦勞がないもんだから、毎日、幾百、幾千の見たり聞いたりしたの感受性の処理が出来なくなつて、ポカンとしてるうちに、そいつらが、お化けみたいな顔になつてポカポカ浮いて来るのではないのかしら。

食堂で、ごはんを、ひとりでたべる。ことし、はじめて、キウリをたべる。キウリの青さから、夏が来る。五月のキウリの青味には、胸がカラッポになるような、うづくような、くすぐつたいような悲しさが在る。ひとりで食堂でごはんをたべていると、やたらむしように旅行に出たい。汽車に乗りたいたい。新聞を読む。近衛さんの写真が出ている。近衛さんて、いい男なのかしら。私は、こんな顔を好かない。額がいけない。新聞では、本の広告文が一ばんのいい。一字一行で、百円、二百円と広告料とられるのだから、皆、一生懸命だ。一字一句、最大の効果を収めようと、うんうん唸つて、絞り出したような名文だ。こんなにお金のかかる文章は、世の中に、少いであろう。なんだか、気味がよい。痛快だ。

ごはんをすまして、戸じまりして、登校。大丈夫、雨が降らないとは思えけれど、それでも、きのうお母さんから、もらったよき雨傘どうしても持って歩きたくて、そいつを携帯。このアンブレラは、お母さんが、昔、娘さん時代に使つたもの。面白い傘を見つけて、私は、少し得意。こんな傘を持って、パリの下町を歩きたい。きつと、いまの戦争が終つたころ、こんな、夢を持つたような古風のアンブレラが流行するだろう。この傘には、ボンネット風の帽子が、きつと似合う。ピンクの裾の長い、衿の大きく開いた着物に、黒い絹レズで編んだ長い手袋をして、大きな鍔の広い帽子には、美しい紫のすみれをつける。そうして深緑のころにパリのレストランに昼食をしに行く。もの憂そうに軽く頬杖して、外を通る人の流れを見ると、誰かが、そつと私の肩を叩く。急に音楽、薔薇のワルツ。ああ、おかし、おかし。現実、この古ぼけた奇態な、柄のひよろ長い雨傘一本。自分が、みじめで可哀想。マツチ売りの娘さん。どれ、草でも、むしつて行きましよう。

出がけに、うちの門のまえの草を、少しむしつて、お母さんへの勤勞奉仕。きょうは何かいことがあるかも知れない。同じ草でも、どうしてこんな、むしりとりたいた草と、そつと残して置きたい草と、いろいろあるのだろう。可愛い草と、そうでない草と、形は、ちつとも違つていないのに、それでも、いじらしい草と、にくにくい草と、どうしてこう、ちゃんとわかれてるのだろう。理窟はないんだ。女の好ききらいなんて、ずいぶんいい加減なものだと思ふ。十分間の勤勞奉仕をすまして、停車場へ急ぐ。島道を通りながら、しきりと絵が画きたくなる。途中、神社の森の小路を通る。これは、私ひとりで見つけて置いた近道である。森の小路を歩きながら、ふと下を見ると、麦が二寸ばかりあちこちに、かたまつて育っている。その青々した麦を見ていると、ああ、ことしも兵隊さんが来たのだと、わかる。去年も、たくさんの兵隊さんと馬がやつて来て、この神社の森の中に休んで行つた。しばらく経つてそこを通つてみると、麦が、きょうのように、すくすくしていた。けれども、その麦は、それ以上育たなかつた。ことしも、兵隊さんの馬の桶からこぼれて生えて、ひよろひよろ育つたこの麦は、この森はこんなに暗く、全く日が当たらないものだから、可哀想に、これだけ育つて死んでしまうのだろう。

神社の森の小路を抜けて、駅近く、労働者四、五人と一緒にいる。その労働者たちは、いつもの例で、言えないような厭な言葉を私に向かって吐きかける。私は、どうしたらよいかと迷つてしまった。その労働者たちを追い抜いて、どんどんさきに行つてしまいたいのだが、そうするには、労働者たちの間を縫つてくぐり抜け、すり抜けしなければならぬ。おつかない。それと言って、黙つて立ちんぼして、労働者たちをさきに行かせて、うんと距離のできるまで待つて居るのは、もつともつと胆力の要ることだ。それは失礼なことなのだから、労働者たちは怒るかも知れない。からだは、カッカして来るし、泣きそうになつてしまった。私は、その泣きそうになるのが恥ずかしくて、その者達に向かつて笑つてやつた。そして、ゆつくりと、その者達のあとについて歩いて

いった。そのときは、それ限りになつてしまつたけれど、その口惜しきは、電車に乗つてからも消えなかつた。こんなくだらない事に平然となれるように、早く強く、清く、なりたかつた。

電車の入口のすぐ近くに空いている席があつたから、私はそこへそつと私のお道具を置いて、スカートのひだをちよつと直して、そうして坐ろうとしたら、眼鏡の男の人が、ちゃんと私のお道具をどけて席に腰かけてしまつた。「あの、そこは私、見つけた席ですの」と言つたら、男は苦笑して平気で新聞を読み出した。よく考えてみると、どつちが図々しいのかわからない。こつちの方が図々しいのかも知れない。

仕方なく、アンブレラとお道具を、網棚に乗せ、私は吊り革にぶらさがつて、いつもの通り、雑誌を読もうと、パラパラ片手でペエジを繰っているうちに、ひよんな事を思つた。

自分から、本を読むというところを取つてしまつたら、この経験の無い私は、泣きべそをかくことだろう。それほど私は、本に書かれてある事に頼っている。一つの本を読んで、パツとその本に夢中になり、信頼し、同化し、共鳴し、それに生活をくつつけてみるのだ。また、他の本を読むと、たちまち、クルツとかわつて、すましている。人のものを盗んで来て自分のものにちゃんと作り直す才能は、そのずるさは、これは私の唯一の特技だ。本当に、このずるさ、いんちきには厭になる。毎日毎日、失敗に失敗を重ねて、あか恥ばかりかいていたら、少しは重厚になるかも知れない。けれども、そのような失敗にさえ、なんとか理窟をこじつけて、上手につくろい、ちゃんとしたような理論を編み出し、苦肉の芝居なんか得々とやりそうだ。

(こんな言葉もどこの本で読んだことがある)

ほんとうに私は、どれが本当の自分だかわからない。読む本がなくなつて、真似するお手本がなんにも見つからなくなつた時には、私は、いつたいどうするだろう。手も足も出ない、萎縮の態で、むやみに鼻をかんでばかりいるかも知れない。何しろ電車の中で、毎日こんなにふらふら考えているばかりでは、だめだ。からだに、厭な温かさが残つて、やりきれない。何かしなければ、どうにかしなければと思うのだが、どうしたら、自分をほつきり掴めるのか。これまでの私の自己批判なんて、まるで意味ないものだつたと思う。批判をしてみて、厭な弱いところに気附くと、すぐそれに甘くおぼれて、いたわつて、角をためて牛を殺すのはよくない、などと結論するのだから、批判も何もあつたものでない。何も考えない方が、むしろ良心的だ。

この雑誌にも、「若い女の欠点」という見出しで、いろんな人が書いて在る。読んでいるうちに、自分のことを言われたような気がして恥ずかしい気にもなる。それに書く人、人によつて、ふだんばかりだと思つている人は、そのとおりに、ばかの感じがするようなことを言っているし、写真で見ても、おしやれの感じのする人は、おしやれの言葉遣いをしているので、可笑しくて、ときどきくすくす笑いながら読んで行く。宗教家は、すぐに信仰を持ち出すし、教育家は、始めから終りまで恩、恩、と書いてある。政治家は、漢詩を持ち出す。作家は、気取つて、おしやれな言葉を使っている。しよつている。

でも、みんな、なかなか確実なことばかり書いてある。個性の無いこと。深味の無いこと。正しい希望、正しい野心、そんなものから遠く離れている事。つまり、理想の無いこと。批判があつても、自分の生活に直接むすびつける積極性の無いこと。無反省。本当の自覚、自愛、自重がない。勇気のある行動をしても、そのあらゆる結果について、責任が持てるかどうか。自分の周囲の生活様式には順応し、これを処理することに巧みであるが、自分、ならびに自分の周囲の生活に、正しい強い愛情を持っていない。本当の意味の謙遜がない。獨創性にとほしい。模倣だけだ。人間本来の「愛」の感覚が欠如してしまつている。お上品ぶつていながら、気品がない。そのほか、たくさんのことが書かれている。本当に、読んでいて、はつとすることが多い。決して否定できない。

けれどもここに書かれてある言葉全部が、なんだか、樂觀的な、この人たちの普段の気持とは離れて、ただ書いてみたというような感じがする。「本当の意味の」とか、「本来の」とかいう形容詞がたくさんあるけれど、「本当の」愛、「本当の」自覚、とは、どんなものか、はつきり手にとるようには書かれていない。この人たちには、わかっているのかも知れない。それならば、もつと具体的に、ただ一言、右へ行け、左へ行け、と、ただ一言、権威をもつて指で示してくれたほうが、どんなに有難いかかわからない。私たち、愛の表現の方針を見失つているのだから、あれもいけない、これもいけない、と言わずに、こうしろ、ああしろ、と強い力で言いつけてくれたら、

私たち、みんな、そのとおりにする。誰も自信が無いのかしら。ここに意見を発表している人たちも、いつでもどんな場合にでも、こんな意見を持つている、というわけでは無いのかもしれない。正しい希望、正しい野心を持つていない、と叱つて居られるけれども、そんなら私たち、正しい理想を追つて行動した場合、この人たちはどこまでも私たちを見守り、導いていつてくれるだろうか。

私たちには、自身の行くべき最善の場所、行きたく思う美しい場所、自身を伸ばして行くべき場所、おぼろげながら判つている。よい生活を持ちたいと思つている。それこそ正しい希望、野心を持つている。頼れるだけの動かない信念をも持ちたいと、あせつて居る。しかし、これら全部、娘なら娘としての生活の上に具現しようとかかったら、どんなに努力が必要なことだろう。お母さん、お父さん、姉、兄たちの考えかたもある。(口だけでは、やれ古いのなんのつて言うけれども、決して人生の先輩、老人、既婚の人たちを軽蔑なんかしていない。それどころか、いつでも二目も三目も置いてはるはずだ) 始終生活と関係のある親類というものもある。知人もある。友達もある。それから、いつも大きな力で私たちを押し流す「世の中」というものもあるのだ。これらすべての事を思つたり見たり考えたりすると、自分の個性を伸ばすどころの騒ぎではない。まあ、まあ目立たずに、普通の多くの人たちの通る路をだまつて進んで行くのが、一ばん利巧なものでしょうくらいに思わずにはいられない。少数者への教育を、全般へ施すなんて、ずいぶんむづかしいことだとも思われる。学校の修身と、世の中の掟と、すぐく違つているのが、だんだん大きくなるにつれてわかつて来た。学校の修身を絶対に守つていると、その人はばかを見る。変人と言われる。出世しないで、いつも貧乏だ。嘘をつかない人なんて、あるかしら。あつたら、その人は、永遠に敗北者だ。私の肉親関係のうちにも、ひとり、行い正しく、固い信念を持つて、理想を追究してそれこそ本当の意味で生きているひとがあるのだけれど、親類のひとみんな、そのひとを悪く言つて居る。馬鹿あつかひしている。私なんか、そんな馬鹿あつかひされて敗北するのがわかつていながら、お母さんや皆に反対してまで自分の考えかたを伸ばすことは、できない。おつかないのだ。小さい時分には、私も、自分の気持とひとの気持と全く違つてしまつたときには、お母さんには、お母さんには、

「なぜ？」と聴いたものだ。そのときには、お母さんは、何か一言で片づけて、そうして怒つたものだ。悪い、不良みたいだ、と言つて、お母さんは悲しがつていたようだった。お父さんに言つたこともある。お父さんは、そのときただ黙つて笑つていた。そしてあとでお母さんに「中心はずれの子だ」とおつしやつていたそうだ。だんだん大きくなるにつれて、私は、おつかなびつくりになつてしまつた。洋服いちまい作るのにも、人々の迷惑を考へるようになってしまつた。自分の個性みたいなものを、本当は、こつそり愛しているのだけれども、愛して行きたいと思つただけで、それをはつきり自分のものとして体現するのは、おつかないのだ。人々が、よいと思ふ娘になろうといつも思う。たくさんの人たちが集まつたとき、どんなに自分は卑屈になることだろう。口に出したくも無いことを、気持と全然はなれたことを、嘘ついでペチャペチャやつている。そのほうが得だ、得だと思ふからなのだ。いやなことだと思ふ。早く道徳が一変するときに来ればよいと思ふ。そうすると、こんな卑屈さも、また自分のためではなく、人の迷惑のために毎日をポタポタ生活することも無くなるだろう。

おや、あそこ、席が空いた。いそいで網棚から、お道具と傘をおろし、すばやく割りこむ。右隣は中学生、左隣は、子供背負つてねんねこ着ているおばさん。おばさんは、年よりのくせに厚化粧をして、髪を流行まきにして居る。顔は綺麗なのだけれど、のどの所に皺が黒く寄つていて、あさましく、ぶつてやりたいほど厭だった。人間は、立つて居るときと、坐つて居るときと、まるつきり考へることが違つて来る。坐つて居ると、なんだか頼りない、無気力なことばかり考へる。私と向かい合つて居る席には、四、五人、同じ年齢恰好のサラライマンが、ぼんやり坐つて居る。三十ぐらゐであろうか。みんな、いやだ。眼が、どろんと濁つて居る。覇気が無い。けれども、私がいま、このうちの誰かひとりに、につこり笑つて見せると、たつたそれだけで私は、ずるずる引きずられて、その人と結婚しなければならぬ破目におちるかも知れないのだ。女は、自分の運命を決するのには、微笑一つでたくさんなのだ。おそろしい。不思議なくらいだ。気をつけよう。けさは、ほんとに妙なことばかり考へる。二、三日まえから、うちのお庭を手入れしに来ている植木屋さんの顔が目にはらついて、しかたがない。どこからどこまで植木屋さんなのだけれど、顔の感じが、どうしてもちがう。大袈裟に言えば、思索家みたいな顔を

している。色は黒いだけにしまつて見える。目がよいのだ。眉もせまつている。鼻は、すぐく獅子つばなだけれど、それがまた、色の黒いのにマッチして、意志が強そうに見える。唇のかたちも、なかなかよい。耳は少し汚い。手といたら、それこそ植木屋さんに逆もどりだけれど、黒いソフトを深くかぶつた日蔭の顔は、植木屋さんにして置くのは惜しい気がする。お母さんに、三度も四度も、あの植木屋さん、はじめから植木屋さんだったのかしら、とたずねて、しまいに叱られてしまった。きょう、お道具を包んで来たこの風呂敷は、ちょうど、あの植木屋さんがはじめて来た日に、お母さんからもらったのだ。あの日は、うちのほうの大掃除だったので、台所直しさんや、畳屋さんはいつていて、お母さんも箆筒たんすのものを整理して、そのときに、この風呂敷が出て来て、私がおもらった。綺麗な女らしい風呂敷。綺麗だから、結ぶのが惜しい。こうして坐つて、膝の上のせて、何度もそつと見てみる。撫でる。電車の中の皆の人にも見てもらいたけれど、誰も見ない。この可愛い風呂敷を、ただ、ちよつと見つめてさえ下さつたら、私は、その人のところへお嫁に行くことにきめてもいい。本能、という言葉につき当たると、泣いてみたくなる。本能の大きさ、私たちの意志では動かせない力、そんなことが、自分の時々のいろんなことから判つて来ると、気が狂いそうな気持になる。どうしたらよいのだろうか、とぼんやりなつてしまふ。否定も肯定もない、ただ、大きな大きなものが、がばと頭からかぶさつて来たようなものだ。そして私を自由に引きずりまわしているのだ。引きずられながら満足している気持と、それを悲しい気持で眺めている別の感情と。なぜ私たちは、自分だけで満足し、自分だけを一生愛して行けないのだろう。本能が、私のいままでの感情、理性を喰つてゆくのを見るのは、情ない。ちよつとでも自分を忘れることがあつた後は、ただ、がっかりしてしまふ。あの自分、この自分にも本能が、はつきりあることを知つて来るのは、泣けそうだ。お母さん、お父さんと呼びたくなる。けれども、また、真実というものは、案外、自分が厭だと思つているところに在るのかも知れないのだから、いよいよ情ない。

もう、お茶の水。プラットフォームに降り立つたら、なんだかすべて、けろりとしていた。いま過ぎたことを、いそいで思いかえしたく努めたけれど、いつこうに思い浮かばない。あの、つづきを考えようと、あせつたけれど、何も思うことがない。からつぽだ。その時、時には、ずいぶんと自分の気持を打つたものもあつたようだし、くるしい恥ずかしいこともあつたはずなのに、過ぎてしまえば、何もなかったのと全く同じだ。いま、という瞬間は、面白い。いま、いま、と指でおさえているうちにも、いま、は遠くへ飛び去つて、あたらしい「いま」が来ている。ブリッジの階段をコトコト昇りながら、ナンジャラホイと思つた。ばかばかしい。私は、少し幸福すぎるのかも知れない。

けさの小杉先生は綺麗。私の風呂敷みたいに綺麗。美しい青色の似合う先生。胸の真紅のカーネーションも目立つ。「つくる」ということが、無かつたら、もつともつこの先生すぎなのだけれど。あまりにポオズをつけすぎる。どこか、無理がある。あれじゃあ疲れることだろう。性格も、どこか難解なところがある。わからないところをたくさん持つている。暗い性質なのに、無理に明るく見せようとしているところも見える。しかし、なんといつても魅かかれる女のひとだ。学校の先生なんてさせて置くの惜しい気がする。お教室では、まえほど人気が無くなつたけれど、私は、私ひとり、まえと同様に魅かかされている。山中、湖畔の古城に住んでいる令嬢、そんな感じがある。厭に、ほめてしまったものだ。小杉先生のお話は、どうして、いつもこんなに固いのだろう。頭がわるいのじゃないかしら。悲しくなつちやう。さつきから、愛国心について永々ながながと説いて聞かせているのだけれど、そんなこと、わかりきつていないじゃないか。どんな人になつて、自分の生まれたところを愛する気持はあるのに。つまらない。机に頬杖ついて、ぼんやり窓のそとを眺める。風の強いゆえか、雲が綺麗だ。お庭の隅に、薔薇の花が四つ咲いている。黄色が一つ、白が二つ、ピンクが一つ。ぽかんと花を眺めながら、人間も、本当によいところがある、と思つた。花の美しさを見つけたのは、人間だし、花を愛するのも人間だもの。

お昼御飯のときは、お化け話が出る。ヤスベエねえちゃんの、「高七不思議の一つ、「開かずの扉」には、もう、みんな、きやあ、きやあ。ドロンドロン式でなく、心理的なので、面白い。あんまり騒いだので、いま食べたばかりなのに、もうペコになつてしまった。さつそくアンパン夫人から、キヤラメル御馳走になる。それからまた、ひとしきり恐怖物語にみなさん夢中。誰でもかれでも、このお化け話とやらには、興味が湧わくらしい。一つの刺

載でしようかな。それから、これは怪談ではないけれど、「久原房之助」の話、おかしい、おかしい。

午後の図画の時間には、皆、校庭に出て、写生のお稽古。伊藤先生は、どうして私を、いつも無意味に困らせるのだろう。きょうも私に、先生ご自身の絵のモデルになるようお願いつけた。私のけき持参した古い雨傘が、クラスの大歓迎を受けて、皆さん騒ぎたてるものだから、とうとう伊藤先生にもわかってしまつて、その雨傘持つて、校庭の隅の薔薇の傍に立っているよう、言いつけられた。先生は、私のこんな姿を画いて、こんど展覧会に出すのだそうだ。三十分間だけ、モデルになってあげて承諾する。すこしでも、人のお役に立つことは、うれしいものだ。けれども、伊藤先生と二人で向かい合っていると、とても疲れる。話がねちねちして理窟が多すぎるし、あまりにも私を意識しているゆえか、スケッチしながらでも話すことが、みんな私のことばかり。返事するのも面倒くさく、わずらわしい。ハッキリしない人である。変に笑つたり、先生のくせに恥ずかしがつたり、何しろサツパリしないのには、ゲツとなりそうだ。「死んだ妹を、思い出します」なんて、やりきれない。人は、いい人なんだろうけれど、ゼスチュアが多すぎる。

ゼスチュアといえば、私だつて、負けないでたくさんに持っている。私のは、その上、ずるくて利巧に立ちまわる。本当にキザなのだから始末に困る。「自分は、ポオズをつくりすぎて、ポオズに引きずられてる嘘つきの化けものだ」なんて言つて、これがまた、一つのポオズなのだから、動きがとれない。こうして、おとなしく先生のモデルになつてあげていながらも、つくづく、「自然になりたい、素直になりたい」と祈っているのだ。本なんか読むの止めてしまえ。観念だけの生活で、無意味な、高慢ちぎの知つたかぶりなんて、軽蔑、軽蔑。やれ生活の目標が無いの、もつと生活に、人生に、積極的になればいいの、自分には矛盾があるのどうのつて、しきりに考えたり悩んだりしているようだが、おまえのは、感傷だけさ。自分を可愛がつて、慰めているだけなのさ。それから、いぶん自分を買いかぶつて居るのですよ、ああ、こんな心の汚い私をモデルにしたりなんかして、先生の画は、きつと落選だ。美しいはずがないもの。いけないことだけれど、伊藤先生がばかに見えてしまうがな。先生は、私の下着に、薔薇の花の刺繍のあることさえ、知らない。

だまつて同じ姿勢で立っていると、やたら無性に、お金が欲しくなつて来る。十円あれば、よいのだけれど。「マダム・キュリイ」が、いばん読みたい。それから、ふつと、お母さん長生きするように、と思う。先生のモデルになつて居ると、へんに、つらい。くたくたに疲れた。

放課後は、お寺の娘さんのキン子さんと、こつそり、ハリウッドへ行つて、髪をやつてもらふ。できあがつたのを見ると、頼んだようにできていないので、がっかりだ。どう見たつて、私は、ちつとも可愛くない。あさましい気がした。したたかに、しよげちやつた。こんな所へ来て、こつそり髪をつくつてもらふなんて、すごく汚らしい一羽の雌鶏めんどりみたいな気さえて来て、つくづくいまは後悔した。私たち、こんなところへ来るなんて、自分自身を軽蔑していることだと思つた。お寺さんは、大はしゃぎ。

「このまま、見合に行こうかしら」なぞと乱暴なこと言い出して、そのうちに、なんだかお寺さんご自身、見合いに、ほんとうに行くことにきまつてしまつたような錯覚を起したらしく、

「こんな髪には、どんな色の花を挿さしたらいいの？」とか、「和服のときには、帯は、どんなのがいいの？」なんて、本気にやり出す。

ほんとに、何も考えない可愛らしいひと。

「どなたと見合いなさるの？」と私も、笑いながら尋ねると、

「もち屋は、もち屋と言いますからね」と、澄まして答えた。それどういう意味なの、と私も少し驚いて聴いてみたら、お寺の娘はお寺へお嫁入りするのがいばんいいのよ、一生食べるのに困らないし、と答えて、また私を驚かせた。キン子さんは、全く無性格みたいで、それゆえ、女らしさで一ぱいだ。学校で私と席がお隣同士だというだけで、そんなに私は親しくしてあげているわけでもないのに、お寺さんのほうでは、私のことを、あたしのいばんの親友です、なんて皆に言つて居る。可愛い娘さんだ。一日置きに手紙をよこしたり、なんとなくよく世話をしてくれて、ありがたいのだけれど、きょうは、あんまり大袈裟にはしゃいでるので、私も、さすがにいやになつた。お寺さんとわかれて、バスに乗つてしまつた。なんだか、なんだか憂鬱ゆううつだ。バスの中で、いやな女

のひとを見た。襟のよごれた着物を着て、もじやもじやの赤い髪を櫛一本に巻きつけている。手も足もきたない。それに男か女か、わからないような、むっとした赤黒い顔をしている。それに、ああ、胸がむかむかする。その女は、大きいおなかをしているのだ。ときどき、ひとり、にやにや笑っている。雌鶏。こつそり、髪をつくりに、ハリウッドなんかへ行く私だつて、ちつとも、この女のひとと変らないのだ。

けさ、電車で隣り合せた厚化粧のおばさんをも思い出す。ああ、汚い、汚い。女は、いやだ。自分が女だけに、女の中にある不潔さが、よくわかって、歯ざしりするほど、厭だ。金魚をいじったあとの、あたたまらない生臭さが、自分のからだ一ぱいにしみついているようで、洗つても、洗つても、落ちないようで、こうして一日一日、自分も雌の体臭を発散させるようになって行くのかと思えば、また、思い当ることもあるので、いつそのまま、少女のまままで死にたくなる。ふと、病気になるたく思う。うんと重い病気になるって、汗を滝のように流して細く痩せたら、私も、すつきり清浄になれるかも知れない。生きている限りは、とてものがれられないことなのだろう。うか。しつかりした宗教の意味もわかりかけて来たような気がする。

バスから降りると、少しほつとした。どうも乗り物は、いけない。空気が、なまぬるくて、やりきれない。大地は、いい。土を踏んで歩いていると、自分を好きになる。どうも私は、少しおつちよこちよいだ。極楽トンボだ。かえろかえろと何見てもかえろ、畠の玉ねぎ見見いかえろ、かえろが鳴くからかえろ。と小さい声で唄つてみて、この子は、なんてのんきな子だろう、と自分ながら歯がゆくなって、背ばかり伸びるこのボーボーが憎らしくなる。いい娘さんになろうと思つた。

このお家に帰る田舎道は、毎日毎日、あんまり見なれてるので、どんな静かな田舎だか、わからなくなつてしまつた。ただ、木、道、畠、それだけなのだから。きょうは、ひとつ、よそからはじめてこの田舎にやつて来た人の真似をして見よう。私は、ま、神田あたりの下駄屋さんのお嬢さんで、生まれてはじめて郊外の土を踏むのだ。すると、この田舎は、いったいどんなに見えるだろう。すばらしい思いつき。可哀想な思いつき。私は、あらたまつた顔つきになつて、わざと、大袈裟にきよろぎよろろしてみよう。小さい並木路を下るときには、振り仰いで新緑の枝々を眺め、まあ、と小さい叫びを挙げてみて、土橋を渡るときには、しばらく小川をのぞいて、水鏡に顔をうつして、ワンワンと、犬の真似して吠えてみたり、遠くの畠を見るときは、目を小さくして、うつとりした風をして、いいわねえ、と呟いて溜息。神社では、また一休み。神社の森の中は、暗いので、あわてて立ち上つて、おお、こわこわ、と言ひ肩を小さく窄めて、そそくさ森を通り抜け、森のそとの明るさに、わざと驚いたようなふうをして、いろいろ新しく新しく、と心掛けて田舎の道を、凝つて歩いていくうちに、なんだか、たまらなく淋しくなつて来た。とうとう道傍の草原に、ペタリと坐つてしまつた。草の上に坐つたら、つい今しがたまでの浮き浮きした気持が、コトンと音たてて消えて、ぎゅつとまじめになつてしまつた。そうして、このごろの自分を、静かに、ゆつくり思つてみた。なぜ、このごろの自分が、いけないのか。どうして、こんなに不安なのだろう。いつでも、何かにおびえている。この間も、誰かに言われた。「あなたは、だんだん俗っぽくなるのね」

そうかも知れない。私は、たしかに、いけなくなつた。くだらなくなつた。いけない、いけない。弱い、弱いだしぬけに、大きな声が、ワツと出そうになつた。ちえつ、そんな叫び声あげたくらいで、自分の弱虫を、ごまかそうたつて、だめだぞ。もつとどうにかなれ。私は、恋をしているのかも知れない。青草原に仰向けに寝ころがった。

「お父さん」と呼んでみる。お父さん、お父さん。夕焼の空は綺麗です。そうして、夕靄は、ピンク色。夕日の光が靄の中に溶けて、にじんで、そのために靄がこんなに、やわらかいピンク色になつたのでしょうか。そのピンクの靄がゆらゆら流れて、木立の間にもぐつていつたり、路の上を歩いたり、草原を撫でたり、そうして、私のからだを、ふんわり包んでしまします。私の髪の毛一本一本まで、ピンクの光は、そつと幽かにてらして、そうしてやわらかく撫でてくれます。それよりも、この空は、美しい。このお空には、私うまれてはじめて頭を下げたのです。私は、いま神様を信じます。これは、この空の色は、なんとという色なのかしら。薔薇。火車。虹。天使の翼。大伽藍。いいえ、そんなんじゃない。もつと、もつと神々しい。

「みんなを愛したい」と涙が出そうなくらい思いました。じつと空を見てみると、だんだん空が變つてゆくので

す。だんだん青味がかってゆくのです。ただ、溜息ばかりで、裸になってしまいました。それから、いまほど木の葉や草が透明に、美しく見えたこともありません。そつと草に、さわってみました。

美しく生きたいと思います。

家へ帰ってみると、お客様。お母さんも、もうかえって居られる。れいに依って、何か、にぎやかな笑い声。お母さんは、私と二人きりのときには、顔がどんなに笑っていても、声をたてない。けれども、お客様とお話しているときには、顔は、ちつとも笑ってなくて、声ばかり、かん高く笑っている。挨拶して、すぐ裏へまわり、井戸端で手を洗い、靴下脱いで、足を洗っていたら、さかなやさんが来て、お待ちどおさま、まいど、ありがとうと言つて、大きなお魚を一匹、井戸端へ置いていった。なんという、おさかなか、わからないけれど、鱈のこまかところ、これは北海のものの感じがする。お魚を、お皿に移して、また手を洗っていたら、北海道の夏の臭いがした。おとしの夏休みに、北海道のお姉さんの家へ遊びに行ったときのことを思い出す。苦小牧のお姉さんの家は、海岸に近いゆえか、始終お魚の臭いがしていた。お姉さんが、あのお家のがらんと広いお台所で、夕方ひとり、白い女らしい手で、上手にお魚をお料理していた様子も、はつきり浮かぶ。私は、あのととき、なぜかお姉さんに甘えたくて、たまらなく焦がれて、でもお姉さんには、あのところ、もう年ちゃんも生まれていて、お姉さんは、私のものではなかったのだから、それを思えば、ヒユウと冷いすきま風が感じられて、どうしても、姉さんの細い肩に抱きつくことができなくて、死ぬほど寂しい気持で、じつと、あのほの暗いお台所の隅に立ったまま、気の遠くなるほどお姉さんの白くやさしく動く指先を見つめていたことも、思い出される。過ぎ去ったことは、みんな懐かしい。肉親つて、不思議なもの。他人ならば、遠く離れるとしだいに淡く、忘れてゆくものなのに、肉親は、なおさら、懐かしい美しいところばかり思い出されるのだから。

井戸端の茱萸の実が、ほんのりあかく色づいている。もう二週間もしたら、たべられるようになるかも知れない。去年は、おかしかった。私が夕方ひとりで茱萸をとつてたべていたら、ジャパイ黙つて見ているので、可哀想で一つやった。そしたら、ジャパイ食べちゃった。また二つやったら、食べた。あんまり面白くて、この木をゆすぶつて、ポタポタ落としたら、ジャパイ夢中になって食べはじめた。ばかなやつ。茱萸を食べる犬なんて、はじめた。私も背伸びしては、茱萸をとつて食べている。ジャパイも下で食べている。可笑しかった。そのこと、思い出したら、ジャパイを懐かしくて、

「ジャパイ！」と呼んだ。

ジャパイは、玄関のほうから、気取つて走つて来た。急に、歯ざしりするほどジャパイを可愛くなっちゃつて、シッポを強く掴むと、ジャパイは私の手を柔かく囁んだ。涙が出そうな気持になって、頭を打つてやる。ジャパイは、平気で、井戸端の水を音をたてて呑む。

お部屋へはいると、ぼつと電燈が、ともっている。しんとしている。お父さんいない。やつぱり、お父さんがいないと、家の中に、どこか大きい空席が、ポカんと残つて在るような気がして、身悶えしたくなる。和服に着換え、脱ぎ捨てた下着の薔薇にきれいなキスして、それから鏡台のまえに坐つたら、客間のほうからお母さんたちの笑い声が、どつと起つて、私は、なんだか、むかつとなつた。お母さんは、私と二人きりのときはいいけれど、お客が来たときには、へんに私から遠くなつて、冷くよそよそしく、私はそんな時に、一ばんお父さんが懐かしく悲しくなる。

鏡を覗くと、私の顔は、おや、と思うほど活き活きしている。顔は、他人だ。私自身の悲しきや苦しきや、そんな心持とは、全然関係なく、別個に自由に活きている。きょうは頬紅も、つけないのに、こんなに頬がぼつと赤くて、それに、唇も小さく赤く光つて、可愛い。眼鏡をはずして、そつと笑つてみる。眼が、とつてもいい。青く青く、澄んでいる。美しい夕空を、ながいこと見つめたから、こんなにいい目になったのかしら。しめたものだ。少し浮き浮きして台所へ行き、お米をといでいるうちに、また悲しくなつてしまった。せんの小金井の家が懐かしい。胸が焼けるほど恋しい。あの、いいお家には、お父さんもいらしたし、お姉さんもいた。お母さんだつて、若かった。私が学校から帰つて来ると、お母さんと、お姉さんと、何か面白そうに台所か、茶の間で話をしている。おやつを貰つて、ひとしきり二人に甘えたり、お姉さんに喧嘩ふっかけたり、それからきまつて叱られ

て、外へ飛び出して遠くへ遠くへ自転車乗り。夕方には帰って来て、それから楽しく御飯だ。本当に楽しかった。自分を見詰めたり、不潔にぎくしやくすることも無く、ただ、甘えて居ればよかったのだ。なんとという大きい特権を私は享受していたことだろう。しかも平気で。心配もなく、寂しさもなく、苦しみもなかった。お父さんは、立派なよいお父さんだった。お姉さんは、優しく、私は、いつもお姉さんにぶらさがってばかりいた。けれども、すこしずつ大きくなるにつれて、だいいち私が自身いやらしくなって、私の特権はいつの間にか消失して、あかほだか、醜い醜い。ちつとも、ひとに甘えることができなくなって、考えこんでばかりいて、くるしいことばかり多くなつた。お姉さんは、お嫁にいつてしまつたし、お父さんは、もういない。たつたお母さんと私だけになつてしまつた。お母さんもお淋しいことばかりなのだろう。こないだもお母さんは、「もうこれからさきは、生きる楽しみがなくなつてしまつた。あなたを見たつて、私は、ほんとうは、あまり楽しみを感じない。ゆるしてお呉れ。幸福も、お父さんがいらつしやらなければ、来ないほうがよい」とおつしやつた。蚊が出て来ると、ふとお父さんを思い出し、ほどこぎものをする、お父さんを思い出し、爪を切るときにもお父さんを思い出し、お茶がおいしいときにも、きつとお父さんを思い出すそうである。私が、どんなにお母さんの気持をいたわつて、話し相手になつてあげても、やつぱりお父さんとは違うのだ。夫婦愛というものは、この世の中で一ばん強いもので、肉親の愛よりも、尊いものにちがいない。生意気なこと考えたので、ひとりで顔があかくなつて来て、私は、濡れた手で髪をかきあげる。しゅつしゅつとお米をときながら、私は、お母さんが可愛く、いじらしくなつて、大事にしようと、しんから思う。こんなウエーヴかけた髪なんか、さつそく解きほぐしてしまつて、そうして髪の毛をもつと長く伸ばそう。お母さんは、せんから、私の髪の短いのを厭がつていらしたから、うんと伸ばして、きちんと結つて見せたら、よろこぶだろう。けれども、そんなことまでして、お母さんを、いたわるのも厭だ。いやらしい。考えてみると、このごろの、私のいらいらは、ずいぶんお母さんと関係がある。お母さんの気持に、ぴったり添つたいい娘でありたいし、それだからとて、へんに御機嫌とるのもいやなのだ。だまつていても、お母さん、私の気持をちゃんとわかつて安心していらしたつたら、一番いいのだ。私は、どんなに、わがままで、決して世間の物笑いになるようなことはしないのだし、つらくても、淋しくつても、だいじのところは、きちんと守つて、そうしてお母さんと、この家とを、愛して愛して、愛しているのだから、お母さんも、私を絶対に信じて、ぼんやりのんきにしていらしたつたら、それでいいのだ。私は、きつと立派にやる。身を粉にしてつとめる。それがいまの私にとつても、一ばん大きいよろこびなんだし、生きる道だと思つているのに、お母さんたら、ちつとも私を信頼しないで、まだまだ、子供あつかいにしている。私が子供っぽいこと言うと、お母さんはよろこんで、こないだも、私が、ばからしい、わざとウクレレ持ち出して、ポンポンやつてはしゃいで見せたら、お母さんは、しんから嬉しそうにして、

「おや、雨かな？ 雨だれの音が聞えるね」と、とぼけて言つて、私をからかつて、私が、本気でウクレレなんか熱中して居るとでも思つてゐるらしい様子なので、私は、あさましくて、泣きたくなつた。お母さん、私は、もう大人なのですよ。世の中のこと、なんでも、もう知つてゐるのですよ。安心して、私になんでも相談して下さい。うちの経済のことなんかでも、私に全部打ち明けて、こんな状態だから、おまえもと言つて下さつたなら、私は決して、靴なんかねだりはしません。しつかりした、つましい、つましい娘になります。ほんとうに、それは、たしかなのです。それなのに。ああ、それなのに、という歌があつたのを思い出して、ひとりでくすくす笑つてしまつた。気がつくと、私はぼんやりお鍋に両手をつつこんだまま、ばかみたい、あれこれ考えていたのである。

いけない、いけない。お客様へ、早く夕食差し上げなければ。さつきの大きいお魚は、どうするのだろう。とにかく三枚におろして、お味噌につけて置くことにしよう。そうして食べると、きつとおいしい。料理は、すべて、勘で行かなければいけない。キウリが少し残つてゐるから、あれでもつて、三杯酢。それから、私の自慢の卵焼き。それから、もう一品。あ、そうだ。ロココ料理にしよう。これは、私の考案したものでございまして。お皿ひとつひとつに、それぞれ、ハムや卵や、パセリや、キャベツ、ほうれんそう、お台所に残つて在るもの一切合切、いろいろとどりに、美しく配合させて、手際よく並べて出すのであつて、手数は要らず、経済だし、ちつとも、おい

しくはないけれども、でも食卓は、ずいぶん賑やかに華麗になつて、何だか、たいへん贅沢な御馳走のように見えるのだ。卵のかげにパセリの青草、その傍に、ハムの赤い珊瑚礁がちらと顔を出していて、キャベツの黄色い葉は、牡丹の花弁のように、鳥の羽の扇子のようにお皿に敷かれて、緑したたる菠薐草は、牧場か湖水か。こんなお皿が、二つも三つも並べられて食卓に出されると、お客様はゆくりなく、ルイ王朝を思い出す。まさか、それほどでもないけれど、どうせ私は、おいしい御馳走なんて作れないのだから、せめて、ていさいだけでも美しくして、お客様を眩惑させて、ごまかしてしまうのだ。料理は、見かけが第一である。たいてい、それで、ごまかせます。けれども、このロココ料理には、よほど絵心が必要だ。色彩の配合について、人一倍、敏感でなければ、失敗する。せめて私くらいのデリカシイが無ければね。ロココという言葉を、こないだ辞典でしらべてみたら、華麗のみにて内容空疎の装飾様式、と定義されていたので、笑っちゃった。名答である。美しさに、内容なんてあつてたまるものか。純粹の美しさは、いつも無意味で、無道徳だ。きまつている。だから、私は、ロココが好きだ。

いつもそうだが、私はお料理して、あれこれ味をみているうちに、なんだかひどい虚無にやられる。死にそうに疲れて、陰鬱になる。あらゆる努力の飽和状態におちいるのである。もう、もう、なんでも、どうでも、よくなつて来る。ついには、ええつ！と、やけくそになつて、味でも体裁でも、めちやめちやに、投げとばして、ばたばたやつてしまつて、じつに不機嫌な顔して、お客に差し出す。

きょうのお客様は、ことにも憂うつ。大森の今井田さん御夫婦に、ことし七つの良夫さん。今井田さんは、もう四十ちかいののに、好男子みたいに色が白くて、いやらしい。なぜ、敷島などを吸うのだろう。両切の煙草でない、なんだか、不潔な感じがする。煙草は、両切に限る。敷島などを吸っていると、そのひとの人格までが、疑わしくなるのだ。いちいち天井を向いて煙を吐いて、はあ、はあ、なるほど、なんて言っている。いまは、夜学の先生をしているそうだ。奥さんは、小さくて、おどおどして、そして下品だ。つまらないことにでも、顔を畳にくつつけるようにして、からだをくねらせて、笑いむせぶのだ。可笑しいことなんてあるものか。そうして大袈裟に笑い伏すのが、何か上品なことだろうと、思いちがっているのだ。いまのこの世の中で、こんな階級の人たちが、一ばん悪いのではないかしら。一ばん汚い。プチ・ブルというのかしら。小役人というのかしら。子供なんかも、へんに小ましやくれて、素直な元気なところが、ちつともない。そう思っているながらも、私はそんな気持を、みんな抑えて、お辞儀をしたり、笑つたり、話したり、良夫さんを可愛い可愛いと言つて頭を撫でてやつたり、まるで嘘ついて皆をだましているのだから、今井田御夫婦なんかでも、まだまだ、私よりは清純かも知れない。みなさん私のロココ料理をたべて、私の腕前をほめてくれて、私はわびしいやら、腹立たしいやら、泣きたい気持持のだけれど、それでも、努めて、嬉しそうな顔をして見せて、やがて私も御相伴して一緒にごはんを食べたのであるが、今井田さんの奥さんの、しつこい無智なお世辞には、さすがにむかむかして、よし、もう嘘は、つくまいと屹つとなつて、

「こんなお料理、ちつともおいしくございませぬ。なんにもないので、私の窮余の一策なんですよ」と、私は、ありのまま事実を、言つたつもりなのに、今井田さん御夫婦は、窮余の一策とは、うまいことをおっしゃる、と手を拍たんばかりに笑い興じるのである。私は、口惜しくて、お箸とお茶碗ほおり出して、大声あげて泣こうかしらと思つた。じつとこらえて、無理に、にやにや笑つて見せたら、お母さんまでが、

「この子も、だんだん役に立つようになりましたよ」と、お母さん、私のかなしい気持、ちゃんとわかつていらつしやる癖に、今井田さんの気持を迎えるために、そんなくだらないことを言つて、ほほと笑つた。お母さん、そんなにまでして、こんな今井田なんかの御機嫌とすることは、ないんだ。お客さんと対しているときのお母さんは、お母さんじゃない。ただの弱い女だ。お父さんが、いなくなつたからつて、こんなにも卑屈になるものか。情なくなつて、何も言えなくなつちやつた。帰つて下さい、帰つて下さい。私の父は、立派なお方だ。やさしくて、そうして人格が高いんだ。お父さんがいないからつて、そんなに私たちをばかにするんだつたら、いますぐ帰つて下さい。よつぽど今井田に、そう言つてやろうと思つた。それでも私は、やつぱり弱くて、良夫さんにハムを切つてあげたり、奥さんにお漬物とつてあげたり奉仕をするのだ。

ごはんがすんでから、私はすぐに台所へひっこんで、あと片付けをはじめた。早く独りになりたかつたのだ。

何も、お高くとまつているのではないけれども、あんな人たちとこれ以上、無理に話を合せてみたり、一緒に笑ってみたりする必要もないように思われる。あんな者にも、礼儀を、いやいや、へつらいを致す必要なんて絶対にない。いやだ。もう、これ以上は厭だ。私は、つとめられるだけは、つとめたのだ。お母さんだつて、きょうの私のがまんして愛想よくしている態度を、嬉しそうに見ていたじゃないか。あれだけでも、よかつたんだろうか。強く、世間のつきあいは、つきあい、自分は自分と、はつきり区別して置いて、ちゃんちゃん気持よく物事に対応して処理して行くほうがいいのか、または、人に悪く言われても、いつでも自分を失わず、韜晦しないで行くほうがいいのか、どつちがいいのか、わからない。一生、自分と同じくらい弱いやさしい温かい人たちの中でだけ生活して行ける身分の人は、うらやましい。苦勞なんて、苦勞せずに一生すませるんだつたら、わざわざ求めて苦勞する必要なんて無いんだ。そのほうが、いいんだ。

自分の気持を殺して、人につとめることは、きつといいことに違いないんだけれど、これからさき、毎日、今井田御夫婦みたいな人たちに無理に笑いかけたり、相槌うたなければならぬのだつたら、私は、気がいいになるかも知れない。自分なんて、とても監獄に入れないな、と可笑しいことを、ふと思う。監獄どころか、女中さんにもなれない。奥さんにもなれない。いや、奥さんの場合は、ちがうんだ。この人のために一生つくすのだ、とちやんと覚悟がきまつたら、どんなに苦しくとも、真黒になつて働いて、そうして充分に生き甲斐があるのだから、希望があるのだから、私だつて、立派にやれる。あたりまえのことだ。朝から晩まで、くるくるコマ鼠のように働いてあげる。じゃんじゃんお洗濯をする。たくさんよごれものがたまつた時ほど、不愉快なことがない。焦ら焦らして、ヒステリーになつたみたいに落ちつかない。死んでも死にきれない思いがする。よごれものを、全部、一つものこさず洗つてしまつて、物干竿にかけるときは、私は、もうこれで、いつ死んでもいいと思うのである。今井田さん、おかえりになる。何やら用事があるとかで、お母さんを連れて出掛けてしまう。はいはい附いて行くお母さんもお母さんだし、今井田が何かとお母さんを利用するのは、こんどだけでは無いけれど、今井田御夫婦のあつかましが、厭で厭で、ぶんなぐりたい気持がする。門のところまで、皆さんをお送りして、ひとりぼんやり夕闇の路を眺めていたら、泣いてみたくなつてしまう。

郵便函には、夕刊と、お手紙二通。一通はお母さんへ、松坂屋から夏物売出しのご案内。一通は、私へ、いとこの順二さんから。こんど前橋の連隊へ転任することになりました。お母さんによろしく、と簡単な通知である。将校さんだつて、そんなに素晴らしい生活内容などは、期待できないけれど、でも、毎日毎日、厳酷に無駄なく起居するその規律がうらやましい。いつも身が、ちゃんちゃんと決つていられるのだから、気持の上から楽なことだろうと思う。私みたいに、何もしたくなければ、いつそ何もしなくてすむのだし、どんな悪いことでもできる状態に置かれているのだし、また、勉強しようと思えば、無限といつていくくらいに勉強の時間があるのだし、慾を言つたら、よほどの望みでもかなえてもらえるような気がするし、ここからこまでという努力の限界を与えられたら、どんなに気持が助かるかわからない。うんと固くしばつてくると、かえつて有難いのだ。戦地で働いている兵隊さんたちの欲望は、たつた一つ、それはぐつすり眠りたい欲望だけだ、と何かの本に書かれて在つたけれど、その兵隊さんの苦勞をお気の毒に思う反面、私は、ずいぶんうらやましく思った。いやらしい、煩瑣な堂々めぐりの、根も葉もない思案の洪水から、きれいに別れて、ただ眠りたい眠りたいと渴望している状態は、じつに清潔で、単純で、思うさえ爽快を覚えるのだ。私など、これはいちど、軍隊生活でもして、さんざ鍛われたら、少しは、はつきりした美しい娘になれるかも知れない。軍隊生活しなくても、新ちゃんみたいに、素直な人だつてあるのに、私は、よくよく、いけない女だ。わるい子だ。新ちゃんは、順二さんの弟で、私とは同じとしないんだけど、どうしてあんなに、いい子なんだろう。私は、親類中で、いや、世界中で、一ばん新ちゃんを好きだ。新ちゃん、目が見えないんだ。わかいのに、失明するなんて、なんということだろう。こんな静かな晩は、お部屋にお一人でいらして、どんな気持だろう。私たちなら、侘びしくても、本を誦んだり、景色を眺めたりして、幾分それをまぎらかすことが出来るけれど、新ちゃんには、それができないんだ。ただ、黙っているだけなんだ。これまで人一倍、がんばつて勉強して、それからテニスも、水泳もお上手だったのだから、いまの寂しき、苦しきはどんなだろう。ゆうべも新ちゃんのことを思つて、床にはいつてから五分間、目をつぶつてみた。

床にはいつて目をつぶっているのでさえ、五分間は長く、胸苦しく感じられるのに、新ちゃんは、朝も昼も夜も、幾日も幾月も、何も見ていないのだ。不平を言ったり、癩癩を起したり、わがまま言ったりして下されば、私もうれしいのだけれど、新ちゃんは、何も言わない。新ちゃんが不平や人の悪口言ったのを聞いたことがない。その上いつも明るい言葉遣い、無心の顔つきをしているのだ。それがなおさら、私の胸に、ピンと来てしまう。

あれこれ考えながらお座敷を掃いて、それから、お風呂をわかす。お風呂番をしながら、蜜柑箱に腰かけ、ちろちろ燃える石炭の灯をたよりに学校の宿題を全部すましてしまう。それでも、まだお風呂がわかないので、濯ぎ縞縞を読み返してみる。書かれてある事実は、決して厭な、汚いものではないのだ。けれども、ところどころ作者の気取りが目について、それがなんだか、やつぱり古い、たよりなさを感じさせるのだ。お年寄りのせいであろうか。でも、外国の作家は、いくらとしましても、もつと大胆に甘く、対象を愛している。そうして、かえって厭味が無い。けれども、この作品は、日本では、いいほうの部類なのではあるまいか。わりに嘘のない、静かな諦めが、作品の底に感じられてすがすがしい。この作者のものの中でも、これが一ばん枯れていて、私は好きだ。この作者は、とつても責任感の強いひとのような気がする。日本の道徳に、とてもとても、こだわっているので、かえって反撥して、へんにどぎつくなっている作品が多かったような気がする。愛情の深すぎる人に有りがちな偽悪趣味。わざと、あくどい鬼の面をかぶって、それでかえって作品を弱くしている。けれども、この濯東綺譚には、寂しさのある動かない強さが在る。私は、好きだ。

お風呂がわいた。お風呂場に電燈をつけて、着物を脱ぎ、窓を一ぱいに開け放してから、ひっそりお風呂にひたる。珊瑚樹の青い葉が窓から覗いていて、一枚一枚の葉が、電燈の光を受けて、強く輝いている。空には星がキラキラ。なんど見直しても、キラキラ。仰向いたまま、うつとりしていると、自分のからだのほの白さが、わざと見ないのだが、それでも、ぼんやり感じられ、視野のどこかに、ちゃんとはいつている。なお、黙っている。小さい時の白さと違うように思われて来る。いたたまらない。肉体が、自分の気持と関係なく、ひとりで成長して行くのが、たまらなく、困惑する。めきめきと、おとなになってしまおう自分を、どうすることもできなく、悲しい。なりゆきにまかせて、じっとして、自分の大人になって行くのを見ているより仕方がないのだろうか。いつまでも、お人形みたいなからだでいたい。お湯をじゃぶじゃぶ掻きまわして、子供の振りをしてみても、なんとなく気が重い。これからさき、生きてゆく理由が無いような気がして来て、くるしくなる。庭の向こうの原っぱで、おねえちゃん！と、半分泣きかけて呼ぶ他所の子供の声に、はつと胸を突かれた。私を呼んでいるのではないけれども、いまのあの子に泣きながら慕われているその「おねえちゃん」を羨しく思うのだ。私にだつて、あんなに慕って甘えてくれる弟が、ひとりでもあったなら、私は、こんなに一日一日、みつともなく、まごついて生きてはいない。生きることに、ずいぶん張り合いも出て来るだろうし、一生涯を弟に捧げて、つくそうという覚悟だつて、できるのだ。ほんとうに、どんなつらいことでも、堪えてみせる。ひとり力んで、それから、つくづく自分を可哀想に思った。

風呂からあがつて、なんだか今夜は、星が気にかかつて、庭に出てみる。星が、降るようだ。ああ、もう夏が近い。蛙があちこちで鳴いている。麦が、ざわざわいつている。何回、振り仰いでみても、星がたくさん光っている。去年のこと、いや去年じゃない、もう、おとしになってしまった。私が散歩に行きたいと無理言っている。お父さん、病氣だつたのに、一緒に散歩に出て下さつた。いつも若かつたお父さん。ドイツ語の「おまえ百まで、わしや九十九まで」という意味とやらの小唄を教えて下さつたり、星のお話をしたり、即興の詩を作つてみせたり、ステッキついて、唾をピュッピュッ出し出し、あのパチクリをやりながら一緒に歩いて下さつた、よいお父さん。黙つて星を仰いでいると、お父さんのこと、はつきり思い出す。あれから、一年、二年経つて、私は、だんだんいけない娘になつてしまった。ひとりきりの秘密を、たくさんたくさん持つようになりました。

お部屋へ戻つて、机のまえに坐つて頬杖つきながら、机の上の百合の花を眺める。いいにおいがする。百合のにおいをかいでいると、こうしてひとり退屈していても、決してきたない気持が起きない。この百合は、きのうの夕方、駅のほうまで散歩していつて、そのかえりに花屋さんから一本買つて来たのだけれど、それからは、この私の部屋は、まるつきり違つた部屋みたいにすがすがしく、襖をするするとあけると、もう百合のにおいが、

すつと感じられて、どんなに助かるかわからない。こうして、じつと見てみると、ほんとうにソロモンの栄華以上だと、実感として、肉体感覚として、首肯される。ふと、去年の夏の山形を思い出す。山に行ったとき、崖の中腹に、あんまりたくさん、百合が咲き乱れていたのが驚いて、夢中になってしまった。でも、その急な崖には、とてもよじ登ってゆくことができないのが、わかっていたから、どんなに魅かれても、ただ、見ているより仕方がなかった。そのとき、ちょうど近くに居合せた見知らぬ坑夫が、黙ってどんどん崖によじ登っていつて、そしてまたたく中に、いっぱい、両手で抱え切れないほど、百合の花を折って来て呉れた。そうして、少しも笑わずに、それをみんな私に持たせた。それこそ、いっぱい、いっぱいだった。どんな豪勢なステージでも、結婚式場でも、こんなにたくさんの花をもらった人はないだろう。花でめまいがするつて、そのとき初めて味わった。その真白い大きい大きい花束を両腕をひろげてやつとこき抱えると、前が全然見えなかった。親切だった、ほんとうに感心な若いまじめな坑夫は、いまどうしているかしら。花を、危ない所に行つて取つて来て呉れた、ただ、それだけなのだけれど、百合を見るとときには、きつと坑夫を思い出す。

机の引き出しをあけて、かきまわしていたら、去年の夏の扇子が出て来た。白い紙に、元禄時代の女のひとが行儀わるく坐り崩れて、その傍に、青い酸漿が二つ書き添えられて在る。この扇子から、去年の夏が、ふうと煙みたいに立ちのぼる。山形の生活、汽車の中、浴衣、西瓜、川、蝉、風鈴。急に、これを持って汽車に乗りたくなつてしまう。扇子をひらく感じつて、よいもの。ばらばら骨がほどけていつて、急にふわつと軽くなる。クルクルもてあそんでいたら、お母さん帰つていらした。御機嫌がよい。

「ああ、疲れた、疲れた」といいながら、そんなに不愉快そうな顔もしていない。ひとの用事をしてあげるのがお好きなのだから仕方がない。

「なにしろ、話がややこしくて」など言いながら着物を着換えてお風呂へはいる。

お風呂から上がつて、私と二人でお茶を飲みながら、へんにニコニコ笑つて、お母さん何を言ひ出すかと思つたら、

「あなたは、こないだから『裸足の少女』を見たい見たいと言つてたでしょう？ そんなに行きたいなら、行つてもよござんす。そのかわり、今晚は、ちよつとお母さんの肩をもんで下さい。働いて行くのなら、なおさら楽しいでしょう？」

もう私は嬉しくてたまらない。「裸足の少女」という映画も見たいとは思つていたのだが、このごろ私は遊んでばかりいたので、遠慮していたのだ。それをお母さん、ちゃんと察して、私に用事を言いつけて、私に大手をふつて映画見にゆけるように、しむけて下さった。ほんとうに、うれしく、お母さんが好きで、自然に笑つてしまった。

お母さんと、こうして夜ふたりきりで暮すのも、ずいぶん久しぶりだったような気がする。お母さん、とても交際が多いのだから。お母さんだつて、いろいろ世間から馬鹿にされまいと思つて努めて居られるのだろう。こうして肩をもんでみると、お母さんのお疲れが、私のからだに伝わつて来るほど、よくわかる。大事にしよう、と思う。先刻、今井田が来ていたときに、お母さんを、こつそり恨んだことを、恥ずかしく思う。ごめんなさい、と口の中で小さく言つてみる。私は、いつも自分のことだけを考え、思つて、お母さんには、やはり、しん底から甘えて乱暴な態度をとつている。お母さんは、その都度、どんなに痛い苦しい思いをするか、そんなものは、てんで、はねつけている自分だ。お父さんがいなくなつてからは、お母さんは、ほんとうにお弱くなつてゐるのだ。私自身、くるしいの、やりきれないの言つてお母さんに完全にぶらさがつてゐるくせに、お母さんが少しでも私に寄りかかつたりすると、いやらしく、薄汚いものを見たような気がするのは、本当に、わがまますぎる。お母さんだつて、私だつて、やつぱり同じ弱い女なのだ。これからは、お母さんと二人だけの生活に満足し、いつもお母さんの気持になつてあげて、昔の話をしたり、お父さんの話をしたり、一日でもよい、お母さん中心の日を作れるようにしたい。そうして、立派に生き甲斐を感じたい。お母さんのことを、心では、心配したり、よい娘になろうと思うのだけれど、行動や、言葉に出る私は、わがままな子供ばかりだ。それに、このごろの私は、子供みたいに、きれいなところさえ無い。汚れて、恥ずかしいことばかりだ。くるしみがあつたの、悩んでゐるの、寂しいの、悲しいのつて、それはいつたい、なんのことだ。はつきり言つたら、死ぬる。ちゃんと知つて

いながら、一ことだつて、それに似た名詞ひとつ形容詞ひとつ言い出せないじゃないか。ただ、どきまぎして、おしまいには、かつとなつて、まるでなにかみたいだ。むかしの女は、奴隸とか、自己を無視している虫けらとか、人形とか、悪口言われているけれど、いまの私なんかよりは、ずっとずっと、いい意味の女らしきがあつて、心の余裕もあつたし、忍従を爽やかにさばいて行けるだけの叡智もあつたし、純粹の自己犠牲の美しさも知つていたし、完全に無報酬の、奉仕のよろこびもわかまえていたのだ。

「ああ、いいアンマさんだ。天才ですね」

お母さんは、れいによつて私をからかう。

「そうでしょう？ 心がこもつていますからね。でも、あたしの取柄は、アンマ上下、それだけじゃないんですよ。それだけじゃ、心細いわねえ。もつと、いいところあるんです」

素直に思っていることを、そのまま言つてみたら、それは私の耳にも、とつても爽やかに響いて、この二、三年、私が、こんなに、無邪気に、ものをきはきはき言えたことは、なかった。自分のぶんを、はつきり知つてあきらめたときに、はじめて、平静な新しい自分が生れて来るのかも知れない、と嬉しく思つた。

今夜はお母さんに、いろいろの意味でお礼もあつて、アンマがすんでから、オマケとして、クオレを少し読んであげる。お母さんは、私がこんな本を読んでいるのを知ると、やつぱり安心なような顔をなさるが、先日私が、ケツセルの昼顔を読んでいたら、そつと私から本を取りあげて、表紙をちらつと見て、とても暗い顔をなさつて、けれども何も言わずに黙つて、そのまますぐに本をかえして下さつたけれど、私もなんだか、いやになつて続けて読む気がしなくなつた。お母さん、昼顔を読んだことが無いはずなのに、それでも勘で、わかるらしいのだ。夜、静かな中で、ひとりで声たててクオレを読んでいると、自分の声がとても大きく間抜けてひびいて、読みながら、ときどき、くだらなくなつて、お母さんに恥ずかしくなつてしまう。あたりが、あんまり静かなので、ばかばかしさが目立つ。クオレは、いつ読んでも、小さい時に読んで受けた感激とちつとも変らぬ感激を受けて、自分の心も、素直に、きれいになるような気がして、やつぱりいいなと思うのであるが、どうも、声を出して読むのと、目で読むのでは、ずいぶん感じがちがうので、驚き、閉口の形である。でも、お母さんは、エンリコのところや、ガロオンのところでは、うつむいて泣いて居られた。うちのお母さんも、エンリコのお母さんのように立派な美しいお母さんである。

お母さんは、さぎにおやすみ。けさ早くからお出掛けだつたゆえ、ずいぶん疲れたことと思う。お蒲団を直してあげて、お蒲団の裾のところをハタハタ叩いてあげる。お母さんは、いつでも、お床へはいるとすぐ眼をつぶる。私は、それから風呂場でお洗濯。このごろ、へんな癖で、十二時ちかくなつてお洗濯をはじめ。昼間じゃぶじゃぶやつて時間をつぶすの、惜しいような気がするのだけれど、反対かも知れない。窓からお月様が見える。しゃがんで、しゃっしゃつと洗いながら、お月様に、そつと笑いかけてみる。お月様は、知らぬ顔をしていた。ふと、この同じ瞬間、どこかの可哀想な寂しい娘が、同じようにこうしてお洗濯しながら、このお月様に、そつと笑いかけた、たしかに笑いかけた、と信じてしまつて、それは、遠い田舎の山の頂上の一軒家、深夜だまつて背戸でお洗濯している、くるしい娘さんが、いま、いるのだ、それから、パリの裏町の汚いアパートの廊下で、やはり私と同じの娘さんが、ひとりでこつそりお洗濯して、このお月様に笑いかけた、とちつとも疑うところなく、望遠鏡でほんとに見とけてしまったように、色彩も鮮明にくつきり思い浮かぶのである。私たちみんなの苦しみを、ほんとに誰も知らないのだから。いまに大人になつてしまえば、私たちの苦しさ侘びしさは、可笑しなものだつた、とんでもなく追憶できるようになるかも知れないのだけれど、けれども、その大人になりきるまでの、この長い厭な期間を、どうして暮らしていったらいいのだろう。誰も教えて呉れないのだ。ほつて置くよりしようのない、ハシカみたいな病気なのかしら。でも、ハシカで死ぬる人もあるし、ハシカで目のつぶれる人だつてあるのだ。放つて置くのは、いけないことだ。私たち、こんなに毎日、鬱々したり、かつとなつたり、そのうちには、踏みはずし、うんと墮落して取りかえしのつかないからだになつてしまつて一生をめちゃめちゃに送る人だつてあるのだ。また、ひと思いに自殺してしまう人だつてあるのだ。そうなつてしまつてから、世の中のひとたちが、ああ、もう少し生きていたらわかることなのに、もう少し大人になつたら、自然とわかつて来

ることなのにと、どんなに口惜しがったって、その当人にしてみれば、苦しくて苦しくて、それでも、やつとそこまで堪えて、何か世の中から聞こうと懸命に耳をすましていても、やっぱり、何かあたりさわりのない教訓を繰り返して、まあ、まあと、なだめるばかりで、私たち、いつまでも、恥ずかしいスッポカシをくつているのだ。私たちは、決して刹那主義^{せつなしぎ}ではないけれども、あんまり遠くの山を指さして、あそこまで行けば見はらしがいい、と、それは、きつとその通りで、みじんも嘘^{うそ}のないことは、わかっているのだけれど、現在こんな烈しい腹痛を起しているのに、その腹痛に対しては、見て見ぬふりをして、ただ、さあさあ、もう少しがまん、あの山の山頂まで行けば、しめたものだ、とただ、そのことばかり教えている。きつと、誰かが間違っている。わるいのは、あなただ。

お洗濯をすまして、お風呂場のお掃除をして、それから、こっそりお部屋の襖をあけると、百合のにおい。すつとした。心の底まで透明になってしまつて、崇高なニヒル、とでもいったような工合いになった。しずかに寝巻に着換えていたら、いままでやすやすや眠つてるとばかり思っていたお母さん、目をつぶつたまま突然言い出したので、びくつとした。お母さん、ときどきこんなことをして、私をおどろかす。

「夏の靴がほしいと言っていたから、きょう渋谷へ行ったついでに見て来たよ。靴も、高くなったねえ」

「いいの、そんなに欲しくなくなったの」

「でも、なければ、困るでしょう」

「うん」

明日もまた、同じ日が来るのだろう。幸福は一生、来ないのだ。それは、わかっている。けれども、きつと来る、あすは来る、と信じて寝るのがいいのでしょう。わざと、どさんと大きい音たてて蒲団にたおれる。ああ、いい気持だ。蒲団が冷いので、背中がほどよくひんやりして、ついうつとりなる。幸福は一夜おくれて来る。ぼんやり、そんな言葉を思い出す。幸福を待つて待つて、とうとう堪え切れずに家を飛び出してしまつて、そのあくる日に、素晴らしい幸福の知らせが、捨てた家を訪れたが、もうおそかった。幸福は一夜おくれて来る。幸福は、――

お庭をカアの歩く足音がする。パタパタパタパタ、カアの足音には、特徴がある。右の前足が少し短く、それに前足はO型でガニだから、足音にも寂しい癖があるのだ。よくこんな真夜中に、お庭を歩きまわっているけれど、何をしているのかしら。カアは、可哀想。けさは、意地悪してやっただけれど、あすは、かわいがつてあげます。

私は悲しい癖で、顔を両手でびったり覆っていないければ、眠れない。顔を覆つて、じつとしている。

眠りに落ちるときは、糸でもつて私の頭を、ぐつとひいて、私がとろとろ眠りかけると、また、ちよつと糸をゆるめる。すると、私は、はつと気を取り直す。また、ぐつと引く。とろとろ眠る。また、ちよつと糸を放す。そんなことを三度か、四度くりかえして、それから、はじめて、ぐうつと大きく引いて、こんどは朝まで。

おやすみなさい。私は、王子さまのいないシンデレラ姫。あたし、東京の、どこにいるか、ごぞんじですか？もう、ふたたびお目にかかりません。

底本：「女生徒」角川文庫、角川書店
1954（昭和 29）年 10 月 20 日初版発行
1968（昭和 43）年 2 月 5 日 44 版発行

入力：細瀨真弓
校正：細瀨紀子
1999 年 2 月 16 日公開
2003 年 11 月 21 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。